清文鑑和解・飜譯滿語纂編解說

長崎の唐通事等が協力して作り上げた清文鑑和解（飜譯清文鑑）四卷五册と、飜譯滿語纂編五卷十册とについては、大正六年「藝文」第八年誌上に「長崎唐通事の滿州語學」と題して、新村博士の論述が載せられ、從來の所傳に新たに補訂が加へられた。余はこの四月長崎に遊び、縣立圖書館を訪うて親しく兩書を觀、多年の宿望を醫するを得たが、これが今より七十餘年の昔、殆んど何等參考に資すべき書物も無い時代に成し遂げられた辛酸の結晶であることを思ふにつけ、このまゝ天下の孤本として（假令一部分の傳寫が別に存するにしても）現狀に葬り置くことの悲しく、遂に增田館長の好意に愬へ、その全部を寫眞して我が東洋史研究室に備へ、また同學の希望に應じてこれを頒布することゝした。今東京帝國大學文學部及び東洋文庫に備へられるものは卽ちこれである。先人の功業を博く世に傳へることは後學の義務であると共に、その成績は今日に於ても尙ほ學界を裨益する所あるを信ずるが爲に外ならぬ。

清學參贊馮璞（潁川藤三郎）・鄭昌（鄭幹輔）・陳勛（平野繁十郎）三人の監修によつて、鄭永寧以下十四人の若い通事達が、飜譯滿語纂編第一卷二册と清文鑑和解第一卷一册とを作り上げた嘉永四年に先立つこと三十四年、卽ち文化十三年には、江戸に於ては既に高橋景保の滿文輯韻が幕府に上られ、更にそれを補訂した增訂滿文輯韻や別